

	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のことば	蔵書
52	 ささやく河 彫師 伊之助捕物覚え/ 藤沢周平	新潮文 庫・ 1985	長編	元は凄腕の岡っ引き、今は版木彫り職人の伊之助。定町廻り同心石塚宗平の口説きに負けて、何者かに刺殺された島帰りの男の過去を探るために。綿密な捜査を進め、二十五年前の三人組押し込み強盗事件にたどり着いた時、彼の前に現れたあまりにも意外な犯人と哀切きまわりないその動機――江戸を流れる河に下町の人々の息づかいを鮮やかに映し出す長編時代ミステリー。シリーズ第三弾！	○
53	 二天の窟(いわ や)「決闘の 辻」所収 藤沢周平	講談社 文庫・ 1985	短篇	死を賭して得た剣名、生を捨てて得た剣技、何人にも渡すわけにはいかない――。宮本武蔵の最後の戦い、神子上典膳の師の後継を争う決闘。柳生但馬守宗矩の野心のための斬り合い、諸岡一羽斎、愛洲移香斎など、歴史に名を残す名剣客の決闘シーンを、剣の一振り、刃光の閃きまでもリアルに描く剣客小説。全5篇。 □作者のことば□:「半七捕物帳」に書かれている江戸市中の描写を読みながら、時どきかなわないと思うときがある。岡本綺堂が生まれたのは明治五年。はじめて太陽暦が採用され、庄屋、名主の制度が廃止された年である。その十年後の明治十五年はというと、それは伊藤博文が憲法を調査するために渡欧した年であり、むろん内閣も憲法もまだ出来てはいない。その時代、東京の町並みは江戸そのままだったろう。つまり綺堂は、江戸をその目で見たのである。同じく江戸を舞台にした小説を書いても、私には綺堂が見た様な江戸を描くことが出来ないのは明白である。厳密なことを言えば、こんなところにも時代小説を書くむつかしさというものはあるのだろうと思う。	○
54	 花のあと「花 のあと」所収 藤沢周平	文春文 庫・ 1985	短篇	娘ざかりを剣の道に生きたある武家の娘。色白で細面、けして醜女ではないのだが父に似て口がいささか大きすぎる。そんな以登女にもほのかに思いを寄せる男がいた。部屋住みながら道場随一の遣い手江口孫四郎である。老女の昔語りとして端正に描かれる異色の表題武家物語のほか、この作家円熟期の秀作7篇。 □作者のことば□:落とし物をとどけ出ると、本来の所有者から落とし物の価格の10%だかの謝礼が支払われる。むかしは、お礼をもらいたくてとどけたんじゃない、などという人もいたものだが、最近は双方が割り切っていく事務的に事がはこばれるようである。権利、義務といった考え方が、そういう形で日常化するのには人間社会の進歩なのだろうし、また変に心理的な負担が残らない点でもいい方法だと思うが、しかしこういう風景が一般化すると、たとえば市井物の小説などはこれかどうなるのだろうかと考えられることでもある。そのために市井小説がほろびるとは思わないし、またそういう乾いた人間風景をベースにした市井小説もあり得るわけだけれども、最近市井小説が変に書きにくくなってきたのは、こういう世の中と無関係ではないように思われる。	○
55	 本所しぐれ町物 語/ 藤沢周平	新潮文 庫・ 1987	長編	浮気に腹を立てて実家に帰ってしまった女房を連れ戻そうと思いながら、また別の女に走ってしまう小物問屋。大酒のみの父親の借金を、身売りして返済しようとする十歳の娘、女房とじっくりいかず、はかない望みを抱いて二十年ぶりに元の恋人に会うが、幻滅だけを感じてしまう油屋。一見平凡に暮らす人々の心に、起こっては消える小さな波紋、微妙な気持ちの揺れをしみじみ描く連作長編。	○
56	 早春「早 春 その他」所収 藤沢周平	文春文 庫・ 1987	短篇	主流を外れた職場、地方で入り婿状態の息子、妻子持ちと交際中の娘。五年前に妻を亡くし、まだローンの残る建売の家で一人、主人公は自分の役目は終わったと感じている。そんなある日、娘に再婚を勧められ――。初老の勤め人の孤独と寂寥を描いた唯一の現代小説「早春」。加えて時代小説の名品二篇に、随想・エッセイ四篇を収める。作家晩年の心境をうつしだす静謐にして透明な文章！全6篇 □作者のことば□:私は時代小説という器にいろいろなテーマを盛り込みたいほうですが、それにしても時代小説で書くからにはおのずから限界があるわけで、執筆のたびに悩みます。また文章についても美文、名文の時代は過ぎたとしても雑な文章でいいという事ではないとおもいますが、このへんのあんばいがよくわかりません。削って削ってなおうるおいが残るような時代小説の文章を書きたい、と思うだけで、そういうものはなかなか書けません。時代小説のことで、まだまだわからないところが沢山あるように思います。	○

	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のこぼれ	蔵書
57	 ・風の果て	文春文庫・1988	長編	<p>上村隼太と名乗った部屋住みの身分から、首席家老に異例の出世を遂げた桑山又左衛門のもとに、旧友の野瀬市之丞から果たし状が届いた。又左衛門は、政敵を葬って権力を一手に握ったばかりだ。隼太と市之丞、杉山鹿之助、寺田一蔵、三矢庄六は、片貝道場の同期の仲間だ。鹿之助だけが上士の跡取りで格別だったが、ほかの者たちは部屋住みで、婿の話待つ身だ。あるとき、太蔵が原という荒れ野の開拓に成功すれば、藩の窮状を救えるという話を聞き、隼太は太蔵が原に出かけ、開拓に造詣の深い郡奉行の桑山孫助に出会う。それぞれが新たな人生に立ち向かうが、その背後にいつも農民の生活がある。◆出世する者、死ぬ者、日陰者で生涯を終える者。五人の若者は、それぞれの人生を歩む。晩年に至る生き方を、晩年と若者時代とに書き分けた長編。</p>	○
58	 ・蝉しぐれ (読者アンケートNO.1)	文春文庫・1986	長編	<p>普請組の組屋敷で育った牧文四郎は、夏の朝、裏の小川で、蛇に噛まれた隣家の娘ふくの指を吸ってやった。文四郎十五歳、ふく十二歳。忘れられない思い出となった。文四郎は石栗道場に通り、いつも小和田逸平と島崎与之助がいつしょだった。藩主の世継ぎ争いで、文四郎の父が処刑された。遺骸を引き取りに行った文四郎が重い荷車にあえいでいると、ふくが駆け寄り、並んで梶棒を引いた。牧家は家禄を減らされ、古びた長屋に移された。ふくは江戸屋敷に移っていった。文四郎は郷村出役となり、妻帯した。ふくは藩主の側室になり、子を身籠って密かに帰郷し、櫛御殿に囲われていた。そんな折、文四郎は父を処刑した張本人の里村家老に呼び出され、ふくの子をさらうように命じられた。震だった。里村派の封鎖をかいくぐり、文四郎はふくと子連れて、対立する横山家老邸に駆け込む。そして…。 □作者のこぼれ□:「蝉しぐれ」は、一人の武家の少年が青年に成長して行く過程を、新聞小説らしく剣と友情、それに主人公の淡い恋愛感情をからめて書いてみたものだが、じつを言うとこれが苦痛で仕方がなかった。何が苦痛かという、書けども書けども小説が面白くならないのである。会心の一回分などというものは全くない。こういうときは無理な工夫なんかしても仕方がないので、私は勤めて主人公の動きにしたがい、丹念という事だけを心掛けて書き続けた。早く終わってホッとしたいと念じているのに、こういうときに限って小説はなかなか終わらず、予定をかなりオーバーしようやく完結したのだった。作者が退屈するほどだから、読者もさぞ退屈した事だろうと思った。連載中、もちろん一通のファン・レターも来なかった。ところが、である。一冊の本になってみると「蝉しぐれ」は人がそう言い、私自身もそう思うような少しは読みごたえのある小説になっていたのである。これは大変意外なことだった。ばかばかしい手前味噌めいたいい方までしてあえてそういうのは、新聞小説には書き終えてみないとわからないといった性格があることを言いたいのである。</p>	○
59	 ・たそがれ清兵衛「たそがれ清兵衛」所収	新潮文庫・1988	短篇	<p>豪商と結託した家老、堀将監の専横に藩は疲弊していた。反対派は堀を排除するには討ち果たすしかないと考え、藩主の了解を得て上意討ちを決めた。しかし、堀には藩随一の剣士と目される北爪半四郎がついている。そこで討手にえらばれたのが、勘定組五十石で、若いころ無形流の名手といわれた井口清兵衛だ。彼は病妻を抱え、下城の太鼓が鳴ると飛んで帰り家事をするため、「たそがれ」と陰口されていた。上意討ちを命じられた清兵衛は、辞退した。刻限が下城時で、その刻限には妻女の世話があるというのが理由だ。しかし、妻の養生の援助をほのめかされ、いったん下城して家事を済ませてよいと約束されると――。 ◆ほかに「うらなり与右衛門」「ゴマすり甚内」「ど忘れ万六」「だんまり弥助」「かが泣き半平」「日和見与次郎」「祝い人助八」の七篇。 □作者のこぼれ□:小説の中で江戸の風景を描いているときなど、実際はこんな風ではなかったかも知れないなと思うことがある。考証資料や地図をたよりに想像力を働かせ書くとっても、所詮は百聞は一見にしかずである。限界がある。実景とはかなりの誤差が生じよう。しかし過去に戻ることが出来ない以上、われわれはやはり資料をたよりに人それぞれの器量にしたがって江戸を描き出すしかないわけで、そこにもまた創作のたのしみがないわけでもない。</p>	○
60	・潮田伝五郎置文	光国社出版・1991	短篇	<p>家が十七石の軽率の伝五郎は、二つ年上の井沢・三百石の跡取りに、粗末な衣服を侮られた。道場帰りに真剣勝負を挑み、仲裁に入った仲間の姉七重に心を奪われる。――表題作ほか8篇を収めた短編集。 □作者のこぼれ□:虚構を構えて物語を作りながら、風景描写などになると、やはり勝手知った郷里の様子を映していることが多い。そういう意味で、この小説の風土は、やはり旧羽州荘内領のものである。盆踊りは、実際にこの中に書いてあるように、華麗で大掛かりなものだったらいいが、今は残っていない。いつ頃、どういう理由で廃れたものか。それを確かめたいとおもいながら、まだ果たさないでいる。</p>	既読

	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のことば	蔵書
61	 ・ごますり甚内 「たそがれ清兵衛」所収	新潮文庫・1988	短篇	<p>川波甚内は上役に挨拶をするときも愛想笑いし、手に物を下げていれば奪い取って後ろに従う。ごますりの見本のようなものだ。一年前に卒中で倒れた舅が三年前の不正事件に加担したとして、五石の減石が言い渡された。これが表に出る前に石高を戻したいのだ。ある日、家老の栗田が用事を済ませれば家禄を戻すと約束したため、甚内は密書を受け取りに出たが、帰りに五人の侍に囲まれた。甚内は雲弘流の道場で師範代まで務めた剣士だ。三人を斬って密書を届けたが、家禄を戻すという沙汰はない。やがて家老の山内に呼ばれ、襲撃を指示したのが栗田で、不正の張本人だと告げられた。山内は、家禄を戻す代わりに上意討ちを命じた――。 □作者のことば□:時代小説を書くという仕事をしながら、いつも重苦しく胸に引っかかっていることがひとつある。時代小説の将来はどうなるのだろうかという事である。推理小説やSFにつぎつぎと若い気鋭の書き手が現れるけれども、時代小説の新人は出てこない。時代考証が面倒で、若い人が敬遠するのだという説がある。それが事実なら編集者は考証ということを極力甘く採点して、とにかく思うがままに時代小説を書かせ、考証はだんだんに勉強してもらってたらどうだろうかと思ったりもするのだが、考証といかに付き合うかも時代小説を書く才能の一部と考えられるので、事はそう簡単では無いのかも知れない。</p>	○
62	 ・麦屋町屋下がり	新潮文庫・1988	短篇	<p>三十五石御蔵役人片桐敬助は、昨年の御前試合で五人抜きを果たした剣士だ。ある夜、男に追われた女をかばったが、男がいきなり斬りかかってきたため、応戦して斬った。女は弓削新次郎の家内と名乗り、男は舅で醜行があったので逃げたと言った。敬助に落ち度はなかったが、弓削新次郎は、藩随一の剣士で、偏執的な性格を噂される男だ。いまは江戸詰めだが、やがて国元に帰ってくる。敬助は弓削に狙われることを覚悟して、道場の師の紹介で、かつて道場を破門された大塚七十郎に不敗の剣の教えを請うた。国元に戻ってきた弓削は、敬助に戦うきはないと告げたが、やがて弓削の妻女の醜聞が噂されるようになり、さらに弓削が妻女と密会相手を斬り、茶屋に立て籠もっているとの知らせがきた。討手を命じられた敬助は――。 ◆ほかに「三ノ丸広場下城どき」「山姥橋夜五ツ」「榎屋敷宵の春月」の三篇。</p>	○
63	 凶刃 用心棒日月抄	新潮文庫・1989	長編	<p>好漢青江又八郎も今は四十代半ば、若かりし用心棒稼業の日々は遠い――。国元での平穏な日常を破ったのは、藩の影の組織「嗅足組」解散を伝える密命を帯びての江戸出府だった。なつかしい女嗅足・佐知との十六年ぶりの再会もつかの間、藩の秘密をめぐる暗闘に巻き込まれる。幕府隠密、藩内の黒幕、嗅足組――三つ巴の死闘の背後に在る、藩存亡に関わる秘密とは？ 著者の代表作「用心棒シリーズ」第四作。 □作者のことば□:小説は終わっても作中人物に対する親しみは残っていて、ある日ふと、この小説には後日談があるかも知れない、などという妄想が浮かんで来たりする。後日談であるその小説は、影の組の解体をタテ糸にし、中年になった青江又八郎と佐知の再開と真の別離をヨコ糸にする長い物語になるだろうと、多分書かれはしないだろうその小説のことをぼんやりと考えたりするのも、独立した短篇とは違って、この種のシリーズでは、作者も作中人物の歴史をもとに歩むことになるので、その行方が気にかかるのだと思う。</p>	○
64	 ・三屋清左衛門 残日録 (読者アンケート NO.3)	文春文庫・1989	連作長編	<p>百二十石の御小納戸役から出発して用人に出世した三屋清左衛門は、先代藩主の死を機に隠居した。妻は三年前に病死しており、悠々自適の晩年を願っていたが、実際に隠居してみると世間から隔絶されたようで、気持ちが委縮するのを感じた。隠居後初めての客は、幼馴染みで町奉行所の佐伯熊太だ。頼みごとを持ち込んできたのだ。菓子屋鳴戸の娘おうめは、十年前に一度だけ前藩主の手がついた後、実家に戻って三人扶持をもらう身分になっていた。いまは二十六になるが、そのおうめが身籠もった。それを知って処分せよと言っている人物がいる。実際にやりかねない人物なので、佐伯は困り、清左衛門に事情調査を頼みに来たのだ。こうして清左衛門の隠居仕事が始まり、次々に隠居ならではの仕事を持ち込まれてきたり、問題が発生したりする。それらとかかわりながら、清左衛門は老後の生き方を悟っていく――。 □作者のことば□:三屋清左衛門は五十三歳くらいかな、今の還暦ぐらいと見てもいいのでしょうか。今までの生活から一切身を引くというのは、みんなやっていることだけれども、用人まで務めた人だけに、いかに武家といえども、内心はかなり寂しい気持ちもあったらうと思います。第一回を書き始めてすぐ、これは変なものを書いてしまったと思ったんです。だから、少しずつ藩の動きのほうへ入っていくようにしたわけです。はじめは、ただ隠居をめぐる事件簿みたいにしよとのおもったわけ。ところが、やっぱり今までの現実社会とつないでおいたほうが、人間というのは生きがいがあるんだという考え方に変わりましたね。それで、ああいう藩の抗争の後始末をやったりという物語になったんです。</p>	○

	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のことば	蔵書
65	 ・秘太刀馬の骨	文春文庫・1990	長編	近習頭取の浅沼半十郎は、家老の小出帯刀から、小出の甥の石橋銀次郎とともに、秘太刀「馬の骨」の継承者を探せという命令を受けた。秘太刀「馬の骨」は矢野道場の創始者が、藩主を襲った狂病の暴れ馬の首を斬って藩主を救ったという技で、極秘で相伝されており、継承者は闇の中だ。銀次郎は矢野道場の当主を含め、候補者を高弟たち六人に絞り込んだ。自らも神道無念流の免許を持つ銀次郎は、一人ひとりと実際に立ち会って確かめていくつもりだ。立ち会いを拒む高弟たちに、銀次郎は恐喝まがいの手段まで講じて試合を強要する。立ち会った者は、誰も無傷ではられない。半十郎は、そんな銀次郎のやり方を苦々しく思うが、自らも「馬の骨」への興味がつのる。この調査には派閥争いの裏があるようにも思えてくる。やがて――。	○
66	 天保悪党伝/	新潮文庫・1992	長編	天保年間の江戸の町に、極め付きのワルだが、憎めぬ連中がいた。博打好きの御家人・片岡直次郎、辻斬りで財布を奪う金子市之丞、抜け荷の常習犯・森田屋清蔵、元料理人の悪党・丑松、ゆすりの大名人として知られた河内山宗俊、そして吉原の花魁・三千歳。ひよんなきっかけで知り合った彼らが、大胆にも挑んだ悪事とは――。世話講談「天保六花撰」に材を得た痛快無比の連作長編！	○
67	 玄鳥(げんちょう)「玄鳥」所収	文春文庫・1991	短篇	無外流の剣士として高名だった亡父から秘伝を受け継いだ路は、上意討ちに失敗して周囲から、「役立たず」と嘲笑され、左遷された曾根兵六にその秘伝を伝えようとする。武家の娘の淡い恋心をかえらぬ燕に託して描いた表題作をはじめ、円熟期の最上の果実と称賛された名品集である。他に「浦島」「三月の鯉」「闇討ち」「鶴鷄(みそざい)」を収める。全5篇。 □作者のことば□:ある城下町のことを小説に書き、フィクションの小説だから勝手に町名をつける、これだけのことが、うまく行くときもあり今書いている新聞小説のようにまったくだめなときもある。だめなときは、つぎつぎと新しい町をつくっては名前をつけるので、小さな城下町なのに町だけがやたらと多いというおそろしいことになる。事前に地図を作って町名を考えておけば、そういう無様なことは避けられるわけだが、準備万端とどのえ肝心の小説がうまくいかないこともあり、要するに小説はむつかしいものである。出来、不出来はともかく、途中で小休止して町の名前を考えたりすること自体は、案外わるいことではないのかもしれない。	○
68	 ・漆の実のみのる国	文春文庫・1993	長編	米沢上杉藩十五万石は窮地に陥っていた。越後上杉謙信を祖とする上杉家は、関ヶ原の戦い後、会津二十万石から米沢三十万石に移封されたが、家臣五千人はそのままだった。さらに嗣子問題から十五万石に減り、八代目藩主の重定は浪費家で御側役から成りあがった森平右衛門の専横を許していた。そのころ、世子直丸(治憲、後の鷹山)の周囲には藩改革を志す俊秀が集まり、名君の素質を見抜いて成長を待っていた。改革派が森を誅殺し、重定を隠居させるという状況下で、治憲は十七歳で藩主となった。江戸藩邸での極端なまでの節減を実施した治憲は、初の国入りで重臣の反乱を制し、次々に改革を進め、漆、桑、楮(こうぞ)の三種の苗木三百万本を植えて現金収入の確保を目指す。しかし何十年もかかる計画であり、改革は一向に進まず、挫折の連続だった。治憲はひたすら我慢、辛抱で、藩の立て直しを図るが――。 □作者のことば□:米澤に来てこういうことを言うのは非常に怖いことなんですが、鷹山公は名君なりやということ、名君であるというのは天下知らぬ人はいないわけです。ところが小説に書くときは、それを前提にはしません。書いていくうちに分かるだろうと、まあそういうことで書いていくわけですね、そんなことを言うと、むっとなさる方もあるかも知れません。私だって鶴岡の荘内藩の酒井忠徳公という人は、名君でないかもしれないなんて言われたらむっとしますからね。名君というのは土地の誇りなんです。悪い殿様にいうのにくらべると、気持ち晴れ晴れとするところがある。それでお気持ちはよくわかりますが、まあ作家というものはそういう立場でもって書かないと、色眼鏡がかかって変な小説になります。やはり事実には教えられて、名君なりやということを追及していかなくちゃならない。	○
69	 日暮れ竹河岸/	文春文庫・1996	短篇集	江戸の十二か月を鮮やかに切り取った十二の掌篇と広重の「名所江戸百景」を舞台とした七つの短篇。それぞれに作家秘愛の浮世絵から発想を得て、紡ぎだされた短篇名品集である。市井のひとびとの、陰翳(いんえい)ゆたかな人生絵図を掌の小品に仕上げた極上品。全十九篇を収録。これが作者生前最後の作品集になった。	○

	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のことば	蔵書
70	 ふるさとへ廻る六部は	新潮文庫・1995	エッセイ・自伝	「ふるさとへ廻る六部(巡礼)は気の弱り」これは、山形出身の著者が初めて青森、秋田、岩手へ旅した時の気持ちを、やや自嘲的に表現した古川柳。この旅は東北人である自分の根を再確認する旅だった。庄内地方への郷愁、変貌する故郷への喪失感、時代小説へのこだわりと自負、創作の秘密、そして身辺・自伝随想等を収めた文庫オリジナル・エッセイ集。 □作者のことば□: 私のエッセイ集には、書いた本人も気が引けるほどに生まれ育った田舎の話が頻繁に出てくる。今度の「ふるさとへ廻る六部は」も例外ではなく、やはり田舎のことやら子供のころのことやらが出てくるが、同じく回想を述べても、以前のエッセイ集の場合とはすこしニュアンスが違ったものになったのではないかと私は思っている。(中略)また、やはりこの中の文章を書いている間に、私の老いは深まり徐々に深刻化してきた。老いるという事は人間の自然で、歓迎するようなことではないにしても拒否すべきものでもあるまいと思うけれども、そのような老いの様相というものを少しは書きとどめておきたいと思っている。「ふるさとへ廻る六部は」は、およそそんな中身を持つエッセイ集である。	○
71	 初つばめ「夜消える」所収	実業之日本社文庫・2011 文春文庫・1997	短篇	深川の料理屋に務める長屋住まいのなみ。両親を亡くしてから親代わりとなり面倒を見てきた弟の友吉が、嫁になる相手連れて挨拶にやってきた。幸せな気持ちで出迎えたものの、高価そうな身なりの二人を見て心が乱れ――表題作をはじめ「チャンネル銀河」の人気番組「松平定知の藤沢周平をよむ」が選んだ、庶民の哀歓を描く10篇。 □作者のことば□: ---小剣士T君 私が生まれた村の丘の上に、地方の信仰をあつめている神社があつて、私が小学生の頃に、その境内で学抗の奉納剣道大会が行われたことがある。かなり広範囲の村々の小学校から選手団が来て試合したわけだが、中で0という遠くの小学校から来たT君が断然強かった。出場選手の中でもっとも小柄だった彼の竹刀が一閃すると、相手の防具が防ぎようもなく小気味よい音を立てたことを思い出す。私は今も急にチャンバラ小説を書きたくなることがあるけれども、その気分には子供の頃の読書や映画見物だけでなく、小兵のT君のさっそうとした試合ぶりも大いに影響しているように思うことがある。	○
72	 江戸おんな絵姿十二景「日暮れ竹河岸」所収	文春文庫・1996	短篇	父の店に奉公していた政右衛門が持ってきた縁談の相手は、三十四歳。子が二人いるという。おしづは二十六歳。家は雪駄問屋だったが、父が死ぬとつづれ、いまは寝たきりの母と二人だ。かつて縁談が決まりかけた時、奉公人が一人、もうそばにいたくないと言って辞めた。上方でひとかどの商人になったら会いに来ると言っていたのを、あてにするわけではないが、いつか姿を現すような気もしている(「夜の雪」)。 十二月の季節に対応した風景描写シリーズ。ほかに「うぐいす」「おぼろ月」「つばめ」「梅雨の傘」「朝顔」「晩夏の光」「十三夜」「明鳥」「枯野」「年の市」「三日の暮色」。「広重『名所江戸百景』より」と題した「日暮れ竹河岸」「飛鳥山」雪の比丘尼橋」「大はし夕立ち少女」「猿若町月明かり」「桐畑に雨の降る日」「品川洲崎の男」の七篇も収録。生前最後の短篇集。 □作者のことば□: 「江戸おんな絵姿十二景」は、かなり前に「文藝春秋」本誌に一年間連載したもので、一枚の絵から主題を得て、ごく短い一話をつくり上げるといった趣向の企画だった。一話が大体原稿用紙十二、三枚といった分量ではなかったかと思う。どんな種類の絵にするかは、その当時浮世絵に凝っていたのですぐにこれと決まったが、ただ漫然と自分の好みの浮世絵にお話をつけるだけでは、面白くもなんともない。そこで一月から十二月まで季節に対応した話を、ごく簡単なすじだけつくって、担当編集者の佐野佳苗さんにわたし、それに対応するような絵を探してもらうことにした。その上で、小説に仕上げる時は微調整を行うことにした。絵を編集者の選択にゆだねることで、創作のときのハードルを高めたわけである。だから「江戸おんな十二景」には、若干の遊び心と、小説家としてこの小さな器にどのような中味をもることが出来るか、力柄を試されるような軽い緊張感が同居している。	○
73	 半生の記/	文春文庫・1997		「自分の過去が、書き残すに値するほどのものかと言えば、とてもそんなふうには思えない」という含羞の作家が、初めて綴った貴重な自叙伝。郷里山形、生家と家族、教師と級友、戦中と戦後、闘病生活などが淡々と描かれ、藤沢文学の源泉をあかす稀有なる記録ともなっている。巻末に詳細な年譜み付した、伝記の決定版。 □作者のことば□: 他人の自伝を読むのは好きだが、自分で自伝を書こうとは思わないと、以前なにかに書いた記憶がある。その気持ちは今も変わらず、自伝とか自分史とかを書きたいとは思わない。私は小説を書くことを職業としているので、好むと好まざるとにかかわらず、私という人間は作品に出ている。それだけでも鬱陶しいのに、その上に自伝めいたことなどを書きたくはないというのが正直な気持ちである。また振り返ってみる自分の過去が、書き残すのに値するほどのものかと言えば、とてもそんな風には思えない。悔い多き半生だったという感触も動かない。幸いなことに人生にはいずれ終りがあり、数々の悔恨の記憶もやがては空無に帰するだろう。せつかくそういうありがたい救済に恵まれているというのに、わざわざ悔い多き生涯を書き残すのは愚かである。といったように自伝めいたものを書くことについて、私の気持は大方否定的にしか働かないのであるが、ただ一つ、あれだけ歩んできた道をひととおり振り返ってみないことには分からないかも知れない、と思う事柄がある。あれとは私が小説を書くようになった経緯、もっと端的に言えば、どのような筋道があつて私は小説家になったのだろうかという事である。	○

	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のことば	蔵書
74	 藤沢周平の世界・	文春文庫・1997		向井敏・駒田信二・丸谷才一の3名の作家による巻頭の藤沢作品についてのエッセイから始まる。 駒田信二・暗殺の年輪、常盤新平・又蔵の火と用心棒日月抄、丸元淑生・用心棒日月抄と海鳴り、藤田昌司・一茶、有明夏夫・はしり雨、井上ひさし・橋ものがたり、清原康正・闇の傀儡師、尾崎秀樹・密謀、村上博基・よろずや平四郎活人剣、関川夏央・隠し剣弧影抄・秋風抄とささやく河、皆川博子・風の果て、桶谷秀昭・花のあと、清水房雄・白き瓶、秋山駿・蝉しぐれ、中野孝次・三屋清左衛門残日録と玄鳥、ら15人による、選んだ19作品についての論評を繰り広げている。 城山三郎との対談・インタビュー・「米沢と私の歴史小説」など藤沢周平のエッセイがある。	○
75	 藤沢周平のすべて/	文春文庫・2001		惜しんでも余りある、この作家。その六十九年の生涯と作品の魅力をあますところなく一冊に。丸谷才一、井上ひさしの弔辞から、昔を知る縁の人々の声、各界著名人のエッセイ・対談等に作品リスト。年譜、未公開写真、俳句までも収録した、愛読者のための完全編集版。”藤沢周平の遺した世界”を堪能し尽くす文芸読本である。	○
76	 ・静かな木「静かな木」所収	新潮文庫・1998	短篇	布施孫左衛門は、嫁に行った長女の久仁から、婿に出した末子の邦之助が鳥飼郡兵衛の息子と果し合いをすると聞かされた。邦之助に問いただすと、侮辱されたのだという。斬り合いは避けられない状況だが、問題は邦之助の剣がそこそこのに対して鳥飼の息子は乱暴者で知られることだ。しかも、相手が鳥飼の息子と聞けば、黙っていられない事情もあった。かつて孫左衛門は、郡兵衛の父への義理から郡兵衛の汚職をかばい、家禄を減らされた。ところが郡兵衛は知らぬ顔で中老にまで出世している。孫左衛門は、友人たちの協力を得て、当時の汚職の証拠を握り、郡兵衛を脅して、果し合いをやめさせるように迫った。帰途、孫左衛門は何者かに襲われるが――。 ◆ほかに「岡安家の犬」「偉丈夫」の二篇。 □作者のことば□:青森の三内丸山遺跡の発掘は、縄文所代についてのこれまでの定説を大きく覆すものだという。それほど古くはないが、中世から近世に至るわが国の歴史についても、近年来、網野善彦氏ほかの気鋭の歴史学者が提出してきた興味深い歴史的事実や史観もまた、私には従来の歴史上の定説をゆるがし、書き換えを迫るもののように思われる。思うに歴史は決して固定したものではなく、新しい事実の出現によって何度でも書き換えられるものなのであろう。私のような時代小説家は、とりあえず書き残されている事実面に依拠して書くしかないけれども、歴史的事実がそういうものであることを肝に銘じ、つねに心を柔軟にして歴史に対処する身構えが必要だろうと自戒している。	○
77	藤沢周平――負を生きる物語	集英社新書・2002	高橋敏夫	藤沢周平の魅力とは何か。武家もの、市井もの、浪人もの、捕物ものそれぞれに、人と時代を見る目の確かさ、深く強く描く抜群の小説技法があげられる。著者は、戦争嫌い、熱狂嫌い、流行嫌いの藤沢周平に「反時代的な噴怒」を読み取り、「荒涼として懐かしい物語世界を旅する喜び」を語る。「世界は喜びや愉しみや安心よりも、わずかに悲しみや苦悩や不安が多いと感じる」人間に自分を重ね、作品に触れて「これでしばらく生きていける」とつぶやく。清新な藤沢周平ワールド・ガイドブック。	○
78	 藤沢周平 心の風景・	新潮社・2005	とんぼの本	鶴岡・海坂の四季、月山・鶴ヶ岡城址・二ノ丸の濠にかかる櫻花、羽黒山の杉並木と2446段の石段・国宝の羽黒山五重塔・旧荘内藩校致道館・金峯山のふもと高坂を遠くに望む朝の田園風景・油戸海岸辺りでの日本海に沈む落日・小高い丘である小真木野・落葉の善宝寺貝喰の池・初冬の日本海三瀬立岩・雪降る鶴ヶ城跡など、作品の世界で出会える風景の写りが収められている。	○
79	 藤沢周平の世界 05	朝日新聞社・2006	隠し剣弧影抄・隠し剣秋風抄:十七人の「武士の矜持」	朝日ビジュアルシリーズ・週刊「藤沢周平の世界」について:本シリーズは、藤沢周平が残した作品の内、代表的な作品を取り上げ、ビジュアルな30冊に編集したものです。藤沢周平の文章のハイライト部分を抄録しながら、専門家らによる歴史や時代背景の解説、再現イラスト、第一線の作家によるエッセイなどを、数多くの写真や図版とともに掲載します。 隠されていた十七の剣技が眼前に現れる時、遣い手の歩んだ人生も明らかになる。以降の藤沢作品の原型とも言われる「隠し剣シリーズ」からは、彼が考える「武士道」の本質も見えてくるはずだ。剣技の分析や武士の思想の解説を通して、藤沢周平の「武家もの」の魅力に迫る。「隠し剣」とは、何か。十七の剣法とその遣い手たちをえがいたこのシリーズには、深い暗喩が隠されていた。「隠し剣鬼の爪」をもとに、作家・出久根達郎がその秘密に迫る。	○

	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のことば	蔵書
80	 藤沢周平の世界 02	朝日新聞社・ 2006	用心棒 日月抄 シリーズ: 浪人・又八 郎、腕に おぼえあ り!	朝日ビジュアルシリーズ・週刊「藤沢周平の世界」について:本シリーズは、藤沢周平が残した作品の内、代表的な作品を取り上げ、ビジュアルな30冊に編集したものです。藤沢周平の文章のハイライト部分を抄録しながら、専門家による歴史や時代背景の解説、再現イラスト、第一線の作家によるエッセイなどを、数多くの写真や図版とともに掲載します。百石取りの藩士から一転、裏店の浪人暮らしをするはめに陥った主人公。剣の腕を頼りに用心棒稼業で飯を喰う。江戸の浪人生活や赤穂事件の真相を解きつつ、ユーモアあふれるこの人気長編を紹介する。今までの大石内蔵助像を見直し、自らの内蔵助像を描きたかった――「用心棒日月抄」に忠臣蔵の物語を配したのは、そんな藤沢周平の強いこだわりではなかっただろうか。作家・杉本章子が藤沢周平の人となりから、その胸中を読み解く。	○
81	 別冊太陽 藤沢 周平・	平凡社・ 2006	人間の 哀歎と 過ぎし 世のぬ くもりを 描いた 小説家	”小説職人”のように、ただひたすら藤沢周平は時代小説を書き続け、理想の郷をつくり、普遍の人間像を綴った。――そんな藤沢文学の軌跡をたどる。海辺に立って一望の海を眺めると、水平線はゆるやかな弧を描く。そのあるかなきかのゆるやかな傾斜弧を海坂と呼ぶと聞いた記憶がある。美しい言葉である。海坂ものがたりのくくりで、詩情ゆたかに描かれた青春群像―「蟬ぐれ」、しなやかに生きる海坂の女たち―「花のあと」「玄鳥」、健気に生きる家族のかたち、さまざま―「竹光始末」「鱗雲」「盲目剣返し」、野望のなかに荘内藩史を色濃く残す―「風の果て」、死と向き合う老藩士たちの生きざま―「三屋清左衛門残日録」「宿命剣鬼走り」「静かな木」、庄内弁が大らかに響く村びとの暮らし―「春秋山伏記」。半生の記のくくりで、自分のためだけに書いていた藤沢周平、初期の頃―「溟い海」「暗殺の年輪」など。時代のぬくもりのくくりで、脱藩浪人のしたたかな生―「用心棒日月抄」「孤剣」「刺客」「凶刃」、制度のなかで傑出する武士の生き方―「雪明かり」「冤罪」「野菊守り」「山桜」「一顆の瓜」「証拠人」「遠方より来る」「三ノ丸広場下城とき」、風変わりな剣客たち―「たそがれ清兵衛」「隠し剣弧月抄」「隠し剣秋風抄」「臍曲がり新左」「夢ぞ見し」「ただ一撃」、おっとりした上品な笑い―「よろずや平四郎活人剣」。市井のひとびとのくくりで、水の町に生きる江戸庶民のけなげ―「橋ものがたり」「本所ぐれ町物語」、命がけの選択に近代人の個が描かれる―「海鳴り」「はしり雨」「霜の朝」、ネオ・ハードボイルドの趣―「彫師伊之助捕物覚え」シリーズ「霧の果て神谷玄次郎捕物控」「獄医立花登手控え」、憎もうにも憎めない三人の悪女―「梅雨の傘」「疑惑」「小ぬか雨」「闇の梯子」「闇の歯車」、浮世絵ものがたり―「喜多川広重」「旅の誘い」「日暮れ竹河岸」。歴史のわからなさのくくりで、凄まじく生きた俳人・歌人をひとりの人間として描く―「一茶」「白き瓶小説長塚節」、百姓の蜂起は”義”か否か史実の影に作家の歴史観―「義民が駆ける」「又蔵の火」、傍流の人びとへの視線―「逆軍の旗」「回天の門」、生かされた男たち―「密謀」「雲奔る」「市塵」など「漆の実のみゆるる国」を取り上げている。物語の背景に沿った写真があり、時代の絵図が多数取り上げ、浮世絵・絵巻物・江戸名所図會・三山雅集画図(月山・湯殿山・羽黒山)もある。藤沢周平の父母に始まり、幼年期からの集合写真も含め沢山の写真が取り込まれている。巻末に著作の表紙・略年譜が記されている。藤沢周平のすべてを知るための貴重な資料となる。	○
82	 藤沢周平の世界 04	朝日新聞社・ 2006	たそが れ清兵 衛:さ えない 藩士の 意外な 剣豪	朝日ビジュアルシリーズ・週刊「藤沢周平の世界」について:本シリーズは、藤沢周平が残した作品の内、代表的な作品を取り上げ、ビジュアルな30冊に編集したものです。藤沢周平の文章のハイライト部分を抄録しながら、専門家による歴史や時代背景の解説、再現イラスト、第一線の作家によるエッセイなどを、数多くの写真や図版とともに掲載します。下城の太鼓が鳴るたそがれ時、誰よりも早く詰め所を出て、家路を急ぐ、井口清兵衛。さかやきものび加減で、さえない下級武士だが、実は知る人ぞ知る剣の達人だ。下級武士の生きた世界を追いながら、作品の魅力に迫る。仕事と家庭とに挟まれて、生活のために全力を尽くしている井口清兵衛。その姿に、多くの読者は身につまされる思いをし、かつ共感する。自身も公務員として働いた経験のある作家・立松和平が、「たそがれ清兵衛」の物語が生まれる端緒を読み解く。	○
83	 藤沢周平の世界 06	朝日新聞社・ 2006	彫師伊 之助捕 物覚え シリーズ: 江戸の 闇に挑 む元岡 っ引	朝日ビジュアルシリーズ・週刊「藤沢周平の世界」について:本シリーズは、藤沢周平が残した作品の内、代表的な作品を取り上げ、ビジュアルな30冊に編集したものです。藤沢周平の文章のハイライト部分を抄録しながら、専門家による歴史や時代背景の解説、再現イラスト、第一線の作家によるエッセイなどを、数多くの写真や図版とともに掲載します。消えた女/漆黒の霧の中で/ささやく河―心に傷をもつ、元御岡っ引きの彫師・伊之助。江戸の闇に立ち向かう伊之助の前に数々の謎、七首を持った刺客が立ちはだかる。江戸の治安組織や彫師の実態をたどりながら、江戸版ミステリーを味わおう。全三巻の「彫師伊之助捕物覚え」シリーズは、藤沢作品には珍しいハードボイルドと銘打たれているが、作家・宇江佐真理は、伊之助とおまさの間に流れる大人の恋情を軸に、この作品を読む。	○